

労働者三人変死

西成署管内 今年すでに九十人に

あいらんに凍えた春

被服工場に見舞われた春休期間中の二十一日、大阪市西成区のあいらん地区（新分館一帯）で、三人の労働者の変死体が見つかった。寒さやけんなど死に似たとみられるが、うち二人は身元不明。西成署の調べでは同じような労働者の変死は不況にあつた今年、同管内でこれまでに約九十人に達し、うち三割が身元不明。人知れず凍死として知られる。

二十一日午前三時四十分ごろ、大阪市西成区地区内のあいらん地区の二丁目、南海本線の力一丁下で、労働者の一人が倒れているのを通行人が見つけた。別院に運んだがすでに死んでいた。男は身長一六〇センチ、年齢六十歳くらい、古ぼけた黒の半オーバーに黒ズボン姿。所持品はなく、身元不明。現場付近は同日未明、小雪が降り気温は一度ぐらゐの寒さだったため、同署は凍死とみている。同日午前八時五十分ごろ、第一現場から約五百メートル離れた同区天下茶屋北二丁目の路上で、三十五歳ぐらゐの男が鼻から血を出し倒れて死んでいるのを通りがかりの会社員（？）が見つけた。調べでは、男は左目と右ほおなどに打撲の跡があり、現場付近でけんかするなどして放倒され死したのではなにかとみて傷害致死の疑いで調べ中。

また二十一日午後十一時ごろ、同市茶屋三丁目の路上で、男の横たまりの中で、中年男が倒れているのを見て死んでいた。西成署の調べでは、持っていた外国人登録証から同市内の簡易宿所に住む日雇労働者、鄭海龍さん（ことわかった。外傷はなく約二時間半ほど前、現場を通りかかった同署員が鄭さんをみかけている。

大阪府労働部やあいらん労働会共済会などによると、四十五年の万国博当時、約二万人いた茶ヶ崎地区の労働者は二年間の

ニュースに見る最近の釜ヶ崎

連載II 暴動史録その2

釜ヶ崎と京橋で同時蜂起!!

田 幸 一 編

昭和三八年。五月になってから、この暴動が起こるまで晴れた日はわずか三日しかなかった。四月の末から、季節はずれの長雨は、労働者から仕事を奪った。五月一七日、少ない夜勤仕事を求める労働者に警察が介入。少し時間が遅れて京阪電車京橋駅では、駅員の不手際が原因で群衆が騒いだ。釜ヶ崎で待機する機動隊が京橋へ引っ張り出されるといって一夜であった。

△五月一二日▽ 雨であぶれた労働者が不眠だった。

△一三日▽ 雨。

△一四日▽ 雨。

△一五日▽ 午前四時半、ヤドから小雨の中を府労働部西成分室に直行した。二、三ヶ月前までは一日千

二、三百円の仕事がヤマほどあったのに最近最高千二百五十円で平均七百元という。五十二、三歳の男が「食っていけんから働かんとなあ」と手配師が用意した自家乗用車に乗り込む。不健康な顔の男がそれに続く。いずれも七百元ぐらである。

ヤド代百円、食費二百円の最低生活も守れない。△五月一七日午後六時▽ 大阪市西成区東四条三の五〇

ヤド賃の安い旅館に集中していく。一泊五十円、ドンゴロスまがいの毛布が二枚。……しかし旅館に泊れるものはまだよい方で、雨の中を青カソソというってガード下や民家の軒を借りて夜を過ごす労働者も多い。（清水記者）

△五月一六日▽ 雨。朝、手配師が乗った労働者運搬用の自動車が分室につくと給与や条件をきかずになれ勝ちに車に飛び乗った。なかには定員になって車から引きずりおろされてケガをするものもでた。

「駅長出せ」と群衆

府労働部西成分室前で求人に来たライトバンが労働者五、六人を受けて出発しようとしたところ、仕事にあぶれて分室前のまわりにはいた労働者約五十人がライトバンを取り囲み「オレたちにも仕事をさせろ」とわめきながら車をゆさぶったり、たたいたりした。通行人の「一一〇番」への知らせで西成署員三十人がパトカー五台で現場にかけつけた。労働者たちはライトバンのそばを離れたので、ライトバンは走り去ったがサイレンの音をきいて付近から労働者がぞくぞく集まり、同二十分ごろには五、六百人ぐらいいふくれあがった。

西成署は府警機動隊に出動を要請、機動隊二個中隊（百五十人）が同署で待機した。

△同七時▽ 雨がふり始めたので労働者は約百五十人に減ったが、こんどは取材にきた新聞社の車を取り囲んで足でけったり、通りかかったタクシーに投石するなどの乱暴を始めた。

玉垣西成署長が労働者を説得したのでおさまり四散した。ちようど京阪京橋駅で騒ぎがおこったので、機動隊一個中隊（七五人）が京橋へ移動。

市バスからはじめ出された運動客は京橋商店街にあふれ、約四千人でぎっしりうずまり、人いそいで貧血を起こす女性も現われた。

都島署員がかけつけ説得したが「駅長を出せ」「重役を呼べ」と乗客はおさまらず、「四月一六日に淀屋橋駅に延長してからダイヤが狂い放しだ」「運賃が高い」「サービスが悪い」などと駅長室にだれ込み、日ごろのうっぷんをぶちまけた。この騒ぎで、上下線ともダイヤが大混乱し、淀屋橋―守口間の各駅でも乗客が駅長室にどなり込んだ。

△同八時三〇分▽ 機動隊一個中隊（七五人）が出動して整理した。

△同九時▽ 静まったかのようにみえたが雨がはげしくなり、労働者たちは三、四十人ずつにわかれて分室から阪堺線南霞町駅間およそ四百メートルの府道尼崎―平野線西側にたむろして、ふたたび通行中の車に投石を始めた。

△同九時二〇分▽ 分室から東百五十メートルの南海本線ガード下で、阿倍野橋発柴谷行き市バスⅡ山本末吉運転手（二五）Ⅱの右フロントガラスに投石、ガラス

△同七時一六分▽ 京阪電鉄淀屋橋発守口行き普通電車Ⅱ大植昇運転士（二七）五両編成Ⅱが天満橋駅を出て、千分の三の配の地下軌道をあがったところで電気配線が故障、ストップした。乗務員が降りて点検したが、故障箇所がわからず、後続の三条行き普通電車（二両編成）にあと押しをたのんだ。この電車は力がなく、さらに三分のちの三条行き特急電車Ⅱ山芳樹運転士（二七）五両編成Ⅱに前の七両をあと押しさせた。

このため約二十分立往生したが、三電車の乗客約千三百人に十分な説明をせず、片町駅について特急を京都行き普通に変更したので、前の二電車の乗客約七百人が乗り込んだ。ところがこの電車が京橋駅につくと、また三条行き特急に変更したので乗客はあわててホームに降りた。夕方のラッシュ時のため京橋駅の乗降客約二千人と合流、三千人がホームや構内にあふれた。駅員が「電車が故障なので」「信号機が故障だから」とあいまいな説明をしたので、一部の乗客が怒り駅長室におしかけ窓ガラス一枚が割れた。国電や市電、

が割れ、危険となったので山本運転手はバスを西成署前に横づけして知らせ、同署員が現場付近にいた三人を見つけ、二人は逃げたが住所不定、人夫×屋×男（二二）を器物損壊現行犯で逮捕した。ほかに六人を検挙。また同時刻ごろ同ガード下で阿倍野橋発平林行き市バスⅡ川部守平運転手（二六）Ⅱにも投石、フロントガラスが割れ、乗客の一人がガラスの破片で後頭部、鼻に一週間の切り傷を負った。このほかタクシーなどに対する投石が十件もあった（届け出分のみ）。

府警本部は恵美須町交差点から南行き、四条ロータリーから東行き、西今船交差点から北行き、阿倍野橋から西行きという飯町交差点を中心にした幹線道路約一キロの一般通行車の交通をしゃ断し、八時十時▽には市内全署の緊急部隊四百四十人と西成署の全署員三百人を緊急出動させ、釜ヶ崎一帯の警戒にあたった。

△一八日午前〇時▽ やっと平靜になった。

△同二時▽ 一応警戒を解く。

△同四時▽ 雨もすっかりあがり、青空もみえたので西成労働福祉センター前には待ちかねていた労働者が殺

到。求人トラックにつぎつぎ運ばれるふだんと変わらぬ活発さを取り戻し、求人申し込みも八午前十一時Vまでに約千四百件で平日の二割増しと上々。わずかに仕事にあふれた十数人の労働者がぬれた地下タビをかわかすなど一七日の夜とは打ってかわった平穏さだった。

一八日の警備体制は八午前七時Vころから西成署警備中隊(百人)が釜ヶ崎の要所に待機。また福祉センター前、西成署、府道尼崎一平野線など数ヶ所に「再び自動車に投石するなどの暴力行為がありました。一部の者の煽動によって騒ぎを起さぬようにして下さい」と書いたビラをはったほか二台の広報車で呼びかけた。八夜Vからは仕事帰りの労働者が結集する恐れがあるので特別機動隊四個中隊(四百人)など制・私服警官約千二百人を動員、重点警らに当る方針。

玉垣西成署長談

「こんどのは一昨年の暴動と違って動機が単純なだけに尾を引くことはないだろう。騒ぎを大きくしないため、今夜からは投石、暴行は

もちろん道路に立ちふさがる者なども道交法違反でびしびし検挙、きびしい取り締りをする」

暴動余話

この暴動は一日限りで終わった小規模なものだった。しかし、社会問題化した暴動らしい暴動としては、昭和三六年の第一次暴動に次いで二回目のものであり、しかも第一次暴動をきっかけに、行政側の反省として作られた府労働部西成分室の無能さをさらけ出したのだった。そして、この年の六月一日、府労働部の「西成労働福祉センター」に引き継ぎ発足させようとした矢先のことである。あわてた府労働部は、

①センターの業務開始の際、労働者に食券、タオルなどを記念品として配り、今までつかない労働者の実数をつかむ参考にした。

②センターには五十人分の無料宿泊施設を用意しているが、このほかにセンター裏側の寄り場も開放していき

次号予告

特集

酒

いい呑み屋、わるい呑み屋

か息ためか涙はさけ
さけは涙かため息か
心のうけのすてどころ

酒にまつわる話なら
何でもけっころ
投稿大歓迎!!

するよう奨励したい。貯金することにセンターから十円か二十円かの奨励金を出す方針だ。こんな内容の話を、翌日の一八日に発表している。さらに歩調を合わせるように市民生局は、困窮労働者に貸しつける「小口生活資金」に、丸一鋼管の社長吉村タキノが「恵まれない人たちに」と寄付した百万円をくり込み、その活用を呼びかけると発表した。なんとまあできた話ではないか。この発表された方針が現実に行なわれたかどうか、いちいち言う必要もない。言ったことをそのまま実行するぐらいの姿勢があったら、今ごろになって「労働者の実数をつかむ」とか「小口生活資金」云々を言い出す必要もあるまい。そして、前号でも紹介したがこの年の年末にも暴動が起ころのである。仕事の無い事が原因で、である。次号では、ピストルを奪われた昭和四一年五月二八日の暴動です。今号の資料は全て五月一八日の読売新聞の朝刊と夕刊です。